

第二期 第四十三号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020.02.20 定有堂書店 発行

見えない世界を見えるように

奈良 敏行

「もう一つの仕事」という生き方

萩原 俊郎

「なまもの」と「乾物」

ワクサカソウヘイ

サンゴの枝とカリブーの角

吉田 海将

ジュンク堂のこと

鳥居 貴彦

無限に向かう人々 ①

芝野 浩貴

失われた本屋さんを求めて

ムラカミヒロミ

ムウィーシカの年

山本千津子

鳥取あれこれ その四十二

内田 克彦

「セザンヌにリベルテ」ノ記憶

秦草 梅林

体力で書く復讐譚

古賀 啓三

クリムトのあと(愛知のおいしいもの)

あきの素生

歳月のはなし

ドラマリア

…… 編集後記



見えない世界を見えるように

奈良 敏行

(定有堂 店主)

一月九日、ライターの小宅玲子さんが取材にみえた。

『真夜中の陽だまり』（文芸春秋）で夜間保育園のルポなど社会のリアルに関心を寄せる人だ。本が好きという原点に立ち帰り、昨年からオンライン総合メディアで本屋のルポをはじめ、「双子のライオン堂」「文喫」「ブックスキューブリック」そして「定有堂」と月一ペースの本屋探訪だ。

ちようどいま読んでいる『地図と領土』に「ある人の境遇について知りたいとき、その人にまでする質問は何だろう」という問いかけがあり、質問自体が質問者の姿を鏡に写す問いだと面白く思っていた。そんな折三宅さんが「好きな本は何ですか？」と直截な切込みで問いかけてきた。そのタイミングもあり一瞬息づまるような緊張を感じた。

ランボオの『地獄の季節』だと答えた。「なぜですか？」うまく返せるか戸惑ったが、この日、「変わる」ことの大切さについて語っていたので、この文脈に乗って、ラ

ンボオの「変わり方」に興味があるからと説明した。

ランボオ神話というものがある。十九歳まで詩作に没頭するも突然投げ出しアフリカへ消え武器などの交易商人になったというものだ。本を読む人生から本を売る人生に「変わった」ということが、ランボオが好きだったことと無関係ではないと思うと少し楽しい。たぶん多くの読者は、この変容ありきのランボオの言葉とドラマに引き込まれたはずで、ありきたりの読者体験にすぎない。じつは年末に松崎の小原さんと文学談義を熱く交わしていた影響で、ランボオ周辺の本を読み返していた経緯もあった。でもふといままで気づかなかった読みに気づいた。

ランボオは結局なにかが嫌になったのだ。そこに反知性主義的な感情があつたのではないか。半分は正しくないが、でも残りの半分でそう考えてみる。辞書的には、知的権威やエリート主義に対して懐疑的な立場をとる主義や思想と説明される。

以前雑誌の取材で「好きな映画は？」と聞かれたことがある。そのときは『離愁』と答えた。一九七三年のフランスとイタリアの合作映画で原題は「Le train」。第二次大戦時ドイツからフランスへの引揚げ列車で出会った、富裕層のユダヤ人女性とフランスの普通の男の恋物語だ。終点で離れ離れとなり三年後にゲシュタポの取調

室で再会する。知らないといえればそれで放免。しかし否定しないで共に処刑の運命を選ぶ。しかしジュール・シムノンの原作小説は女を見捨てる。この、ストーリーに割り込むプロットの二重性に魅かれる。

この映画の叙情は市民社会の一時的な崩壊を描くところに漂うと思う。

本を読む圏域は強く文脈に支えられ拘束される。本を売るといふ小商いの圏域には少し違った自由がある。うまく説明できないが、ここにランボオのアフリカの光景が見えるような気がする。捨てて自由になったのは文脈の拘束からだ。

このところ「現場性」が気になり読み漁っていて、佐々木俊尚『「当事者」の時代』にたどりつき、津村喬の評価があまりに高いのに驚き、気功の本『気脈のエコロジー』を読み返してみた。身体性へと露出していく本だ。

「見えない世界を見えるように語り、行動するというのは」、「現実の秩序を否定して別の秩序を作っていく」とする」からだと言語。逆にいうと現実のリアリティが希薄になったということだ。

実存的な不可思議の謎を知ろうとして仏教の本を読み重ねていたら、量子力学的な問いと重なってきた。佐々木閑『科学するブッダ』などだ。謎は結局「粒子と波の二重性」を入口に「二重スリット実験」などで説明され

ていくがよくわからない。(森田邦久『量子力学の哲学』など)。「世界」の外に出て、四次元に身を置けば簡単に理解できる、という結論がたのしい。理解できないがこの世はあるようにあるというのは確かだ。

思考の文脈の拘束性は好きでない。推論するひらめきを重視するアブダクシヨンのの方が好きだ。これとこれとは似ていると思いはじめると、文脈の分別をゆるく崩壊させて、現象を自分なりに説明する方向へと扉を開く。本屋の棚はこのように作られる。見えない世界を見えるように語るエモーションだろうか。

2020.01.24

●本の紹介

(寄贈いただきました。奈良)

三宅玲子 『真夜中の陽だまりルポ・夜間保育園』

文藝春秋 2019

三宅さんが一月にみえたとき、鳥取は雪を一度も見ない冬だった。鳥取駅から県庁方向への大通りを歩きながら、しきりに街のイメージを描こうとしていた。そして最初に尋ねたのが「歓楽街はどこですか？」だった。

ノンフィクションライターで、熊本出身。博多の大歓楽街、中洲近くの夜間保育園を、三年にわたり取材したレポートだ。深夜未明まで幼児を預かる保育園の、存在を知る人は少ない。なぜ、そんなに長時間なのか？まずそのことに驚く。そして次に、それを必要としている人たちがいることを知る。

三宅さんのライターとしてのテーマは「ひとと世の中」。世の中を「ひと」で語り明かす試みだ。「声の小さな人たちの側に立って」身の丈から説き進む。だから切り取る場面は極小の世界だ。絶望でなく希望を語りつづける志の強さに驚かされる。

三宅玲子 『真夜中の陽だまり』 文藝春秋 2019

ミシェル・ウエルベック 『地図と領土』ちくま文庫 2015

ランボオ 『地獄の季節』 小林秀雄訳

ロミー・シュナイダー出演『離愁 Letrain』仏独合作映画 1973

佐々木俊尚 『「当事者」の時代』 光文社新書 2012

津村喬 『気脈のエコロジー』 創元社 1993

佐々木閑 『科学するブツダ』 角川文庫 2013

森田邦久 『量子力学の哲学』 現代新書 2011

定有堂倉吉書店 その②

「もっしーの仕事」という生き方

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
彼の場合、最近よく聞く「副業」とは、ちよつと違う。あれはどこか、もう少し稼きたい、今よりいい生活がしたい、といった匂いや響きがある。でも、彼が求めているのは「仕事を楽しみながら、自分の人生を豊かにすること」なのである。

賢明な読者諸氏は、「なんだか、そんな本、定有堂にあったなあ」と気づかれたかも知れない。「タイニー(スモール)ハウス」「オフグリッド」「間借りカレー」…。

タネを明かすと、新しい働き方を考えていた彼に「定有堂という本屋さんに行けば、何か見つかるかも知れないよ」と勧めた。それが正解だった。皆さんも人生の岐路に悩んだら、奈良さんと定有堂の店内をウロウロしたらいい。きっと何か答えが見つかる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇
さて、ここからは私の話である。

東京から倉吉に帰って早々、悲しい知らせがあった。30年来なじみのパブ「NO・SIDE」が年末に閉店するという。マスターのM氏が「ワシももう年だから引退したい」とのことだった。

長年ラグビー協会の役員を務めてきたマスターは、老舗食堂のオヤジでもあったから料理も美味しく、市内で不動の人気を誇った。ライブができる数少ない店でもあり、私が和菓子屋のダンナと結成したビートルズのコピー・デュオ「ローガンズ」(名前の由来は「想像にお任せする」のデビューも、この店だった。

若い友人から「来年はカレー屋をやりたい」と告げられた。彼は「器用貧乏」という言葉が服を着て歩いているような男で、ドラムはスティックを握ったその日から叩けたというし、ブルース・ギターもうまい。音響や電気技術の知識が豊富で、料理の腕はプロ並み。趣味は釣りとキャンプで、かつよくカスタマイズしたバイクに乗っている。

結婚は二回しているが(そのうち一回は私が仲人をしたが)、今は郊外に山小屋風の小ぶりな家を建てて、独身生活を楽しんでいる。もうホントに頼つたをつねりたくなるほど、うらやましい奴なのである。

ふだんは、わりあいお堅い仕事をしている。その職場は週に3回は休みがあるので、山小屋風の自宅を店に改装し、自分は隣りのバイク小屋を「タイニーハウス」にして住み、「お客さんとのやり取りを楽しみながら、週2日だけのカレー屋をやりたい」という。器用貧乏の男も、ついに自分の「WAY・OF・LIFE」を見つけたのか。

だが、次第に駅前の界限がさびれ、常連客も高齢化。なかなか経営は大変なようだった。「だれか店を継ぐ人、おらんかなあ。厨房も音響・照明もそのまま残すから。そうだ、萩原さん、やつてみんか」突然のマスターからの「ご指名」に、もう一人の自分は「ありえへん」と首を振るのだが、別のもう一人は「せつかくだから、やつてみようか」。予想もしなかった感情が頭をもたげた。

「では一度、カミさんに相談してみます」。自分でも思ってもみなかった言葉が口をついて出た。帰宅してカミさんに話すと「いいよ、あなたがやりたければ」。これまた驚きの返答。「私、東京にいたころ、東日本震災でピアノを弾く仕事が激減して（カミさんの本業はジャズ・ピアノリスト）、錦糸町で音楽バーをやる直前に話がご破算になったから。いいじゃないの、パブのマスターも」

午後6時には会社が終わる。私は徒歩で5分ほどの店に行き、M氏のようにカウンターでチビリチビリやりながら、深夜まで店番をする。時々カミさんやそのトリオが演奏する…。

◇ ◇ ◇

ところが翌日、話を聞きつけた40代の友人から「店を残したい気持ちには分かりますが、やめた方がいいですよ」と忠告があった。「店舗は自前で、家族で切り盛りするならともかく。まず毎月のテナント料というものがあります。それに人件費や光熱費。待てどもひとりの客も来ない日も少なくありません」

彼は若いとはいえ、小さな会社を経営している。根っからのサラリーマンはそこら辺の見通しがまるでダメである。ママゴトのようなパブ経営の夢は、一夜にして現実引き戻された。閉店して1カ月近く、また店の後継者の話は聞こえてこない。

カミさんと時々「あの時やりますと答えていたら、意外に面白い人生になつていたかもよ」と話すことがある。

ジャズを生業にしてきた彼女から見れば、「あなたみたいに月々決まったお金が決まった日に入ってくる生活なんて、想像したこともない」という。なるほど。カミさんのように、ある意味自由だが収入が不安定な仕事。一方、安月給を呪い、肌合わない上司や意にそぐわない仕事をボヤいても、収入や身分は保障されてきたわがサラリーマン人生。

ひよつとしてこの両方が1人の中で共存するなら、まろやかで過不足ない人生が送れはしないか…そんなことをぼんやり考えた。

さて、冒頭の友人はすでに客に出しても恥ずかしくないカレーを作れるが、もう1年かけて店の経営やもてなしを勉強するという。「50歳を迎える来春、オープン予定です」。そうした手間や準備の過程がまた楽しいのかも知れない。

「なまもの」と「乾物」

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

きている。

で、もう少し奥行きを観察すると、梨は「なまもの」で、柿は「乾物」である。この両極端的なジャンルを同時に扱うことが、商いのコツなのだろう、と。

「なまもの」とは、つまりライブである。ライブは、限定された期間においての熱狂を生む。聞けば、その農家さんでも夏と秋の間に十万玉もの梨を売り切るといふ。

逆に、「乾物」である干し柿は、冬から春にかけて、ゆっくり、一万個ほどを売っているという。「乾物」はライブ性に乏しいので、人々がこぞって飛びついたりしないのである。

しかし、この「乾物」である干し柿の存在こそが、商売のベースを支えている、と農家さんは教えてくれた。

夏から秋という季節は、案外に短い。梨というライブを売ることができる時期は、あっとい間に過ぎ去っていく。そして、冬から春という季節は、思っている以上に長い。一年の半分以上が、冬と春に属していると言っても過言ではない。その長い期間を支えてくれる「乾物」、すなわち干し柿の存在こそが商いのベースラインとして重要なのだそうだ。

では、私という文筆業にとって、「なまもの」と「乾物」にあたるものはなんだろうか。

まず、「なまもの」。それは寄稿記事、そしてコント

去る一月、私は東京・新橋にある「鳥取アンテナショップ」にて、干し柿の販売に従事していた。

実に奇妙なアルバイトである。なぜそんなことになったのか、詳しい話は長くなるので割愛するが、要は普段よりお世話になっている河原町の農家さんがそのアンテナショップに出店することになり、売り子として一月末の二日間、一緒に働かないかと誘ってくれたのである。

その農家さんは、梨と柿の二本柱で生計を立てている。夏から秋にかけては梨を販売し、そして冬から春にかけては干し柿を売っているのだ。

売り子をしながら、「なるほど」と思い至ったことがある。

梨も干し柿も、いわゆる「季節もの」である。それぞれ、販売できる時期が決まっている。そして、その販売の時期が絶妙にズレているから、その農家さんは一年を通して安定的なサイクルで商品の供給を果たすことがで

台本を指すのだと思う。つまり、ライブ性や活字性が高いテキスト、「一回きり」の形式の中でしか垂直に存在することのできない文章たちのこと。そういつた「なまもの」系の仕事は、私の商いにおいて、メインストリームの存在である。水商売にとって「なまもの」は大変に実入りのよいコンテンツなのだ。

じゃあ、私にとつての「乾物」とはなんだろう。それは、書籍にほかならない。ライブ性は乏しいが、しかし販売できる期間は長い。そして私は自著本という「乾物」の基本ベースがあるからこそ、今日もこうして文筆業を名乗ることができている。

今後は「乾物」である干し柿をもっとベースアップしていくことが、2020年代の商いのコツだと考えている、とその農家さんは語っていた。聞けば、干し柿が強く支持されている台湾に、自分たちの商品を持ち込む方法を模索している最中だという。

それを聞いて、ああ、自分はいままで梨の販売ばかりに気を注いでいて、干し柿の販売についてはさぼってきましていたな、と深く反省した。

「なまもの」は確かにお金に換えやすいが、しかしその「なまもの」の販売は、「乾物」の存在があったからこそ、実行できていたのだ。「なまもの」は「乾物」に拠っているのだ。そしてそのベースラインである「乾物」

のフェーズをアップしてやれば、当然、「なまもの」の販売精度の質も増すのである。そこを自分は、いままですぼっていた。

今年は「乾物」、つまり既刊や新刊の自著単行本たちを、新たな棚へとリリースすることに力を注ぐと決めた。私の「干し柿」たちは、きっとまだまだ売ることが出来る。たとえば北京語に翻訳して、ZINEとしてそれこそ台湾の本屋などに売り込んでみたらどうだろう。英語版として電子書籍やネット販売するのも面白そうだ。そしてその傍らで、「なまもの」も依然と売り続けるのである。

「なまもの」と「乾物」を自分の中に持つこと。これって、商売者だけに限らず、あらゆる人々の生活にも応用できるメソッドの気がしている。

あなたにとつての、梨と干し柿は、なんですか。

・筆者からのお知らせ

WEBにて『エクソダス・フロム・イシヨクジュー』という連載をやっています。是非、検索して読んでいただければ幸いです。

あと、noteでコラムなどもアップしています。投げ銭ができるので、この欄を読んだら幾ばくかのお金を入れてみてください。私からの手紙が届きます。私はお金が欲しいのです。

サンゴの枝とカリブーの角

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

サンゴの枝とカリブー(トナカイ)の角。
単身赴任中の私の机の上に、ごろんと置かれていて、毎日のように眺めている。

雑貨やインテリアにほとんど興味がない私だが、いずれも、旅先の偶然の出会いから手に入れたものだ。

まずサンゴの枝。1月上旬に、伊豆半島で路線バス途中下車の旅に出かけたのだが、最南端の石廊崎に立ち寄った。特産品などを販売するショップで目にとまったのが、幅30センチほどの細身の白いサンゴの枝だった。沖縄などの海岸で打ち寄せられたサンゴを拾ったことがあるが、波に碎かれ、小さなものしか見つけれなかった。

サンゴの工芸品の隅に置かれていた、その枝には値札

がついてなかった。店の人に聞くと、その棚には地元の人が出品しており、私が尋ねたものは、売り物ではなくディスプレイだという。そう聞くと欲しくなるものだが、しようがない、と思ったそのとき「持ち主、知ってるよ」と後ろから声がかかった。

周辺の散策ガイドをしているおばちゃんで、持ち主に電話で交渉してくれるという。携帯電話で事情を説明し、手の幅で大きさを持ち主に伝えると「1700円だつて！」と教えてくれた。どういう根拠かわからないが、半端な値段の付け方に素人らしからぬものを感じた私は「買います！」と即答した。

人との出会いによって、素敵なおモノにも出会えることは、旅の魅力だ。

幅50センチ余りもあるカリブーの角を購入したのは3年前の冬、米国・アラスカの地方の街、フェアバンクスでのことだ。

写真家の故・星野道夫が多くの時を過ごした地を目指し、当時小2だった長女と10日ほど旅をした。星野にとつてカリブーは特別な動物だ。極北の地で何日も待ち続け、撮影した大きな群れは「ナショナル・ジオグラフィック」誌に掲載されたことで知られる。

現地では老夫婦の家にホームステイし、犬ぞり体験やオーロラウォッチングに挑戦した。ステイを終える日におばあちゃんが、娘にプレゼントしてくれたのが、カリブーの角の小さなかけらだった。「帰ったらネットクレスにでもしてみて」と笑顔で送り出してくれた。

街の中心部で、かけらをネットクレスに仕立ててくれそうな店を探すと、ある雑貨店の人が「あの男なら」と職人を紹介してくれた。中心部のはずれにある職人の店を尋ねると、看板には「THE CRAFT MARKET」とある。観光客向けの土産物を買っていたが、ハンドメイドの工芸品も扱い、素敵な工房もあった。迎えてくれたオーナーのティムは白髭、白髪のサンタクロス風の職人。まず、角のかけらを見せてネットクレスをオーダーすると、すぐにドリルを使い小さな穴を開けて、ひもを通してくれた。お代は1ドルで良いという。

その親切さに甘えて、私はもしかしたらと思ひ、カリブーの角を分けてくれないか、と頼んだ。店には角の工芸品がたくさんあったからだ。サンタクロスからは少しの警戒を感じたが、長女と一緒にいることが、それを和らげたのは確かだろう、地下の作業場に案内してくれた。そこには、彼が加工するために集めたカリブーの角が積み上げられていた。「Whatever you like!」言われるがままに、私はとてもリーズナブルな値段で気に入っ

たものを選ぶことができた。

机の上にある角には、かつてあったであろう艶はなく、その質感から長い年月の経過を感じさせる。アラスカの厳しい自然とともに、サンタクロスとの素敵なやりとりや、長女との楽しい旅を思い出させてくれる。



ジュンク堂の二ト

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

ジュンク堂のことを書くこうと思って2週間くらいウジウジしている。四条通りのジュンク堂。やけに細長いジュンク堂。エスカレーターの下にスタッフの人がいるジュンク堂。ジュンク堂京都店。

2月末で閉店するというニュースを目にして初めて知ったのは、開店が一九八八年だったということ。今年32歳。同じ年だった。

一年前の同じ時期、かつて自分の働いていた本屋が閉店した。幸いにも閉店の一部を手伝わせてもらうことができ、最後を見届けた。そのとき、自分のなかで何かが死んだ気がする。店は閉まるもの。そんな諦めが、いま、自分の中にある。この一年、本屋がなくなるといふニュースに心を動かされることがほとんどなくなっていた。どこかで「仕方ない」と思っていた。

でもジュンク堂はちよつと違った。

小学生くらいのとき「おっきい本屋さん」といえば河原町のジュンク堂か京都駅のアバンティだった。親に連れられて映画を観た帰りによると。絵本売り場は一番上で、エスカレーターにずっと乗って行く。目当ての本があるよるこびよりも、どこまでいっても、どのフロアにも、ずらつと本が並んでいる景色に興奮した。

大学生になって、卒論のテーマを見つけたのもあのジュンク堂だった。当時、高知の大学に通っていた僕が、あのときなぜ京都のジュンク堂にいたのか、いまとなつてはもうわからない。四回生の春か夏、なにも考えられず、でも気持ちだけが焦っていた頃。どんだん先にすすむ同級生たち。「なにかみつかるだろう」と仏教とか哲学の棚をさまよっていた。なにを探すでもないけれど、行けばなにか見つかる店だった。そのときに買った『ヨーロツパの仏陀』はいまも実家のどつかにある。内容はほとんどおぼえてない。なんかわからんけどいつたらなんかある店。おすすめの本がグイグイ主張してくるわけでもない。とにかくいっぱいある。その安心感。

社会人になって、本屋に勤めはじめるとやたらと「毎週ジュンク堂にいつてこい」と上司に言われた。面になっ

てる本見てこい。時間なかったら一階の新刊台だけ見るんでもいい。あそこいったら旬の本がある。見逃してた新刊がある。何が積んであるか、いま何が売れてるか見てこい。前に行ったときと何が変わってるか、何が変わってないか見てこい。パソコンの画面で発注してるだけではわからへんことがぜったいある。いったらなんか見つかる。ほんで、ひととおりに見せてもらったら文庫本でいいから一冊くらい買いなさい。それが宿題だった。ほかの店ではなく、ジュンク堂。なんでジュンク堂？とはおもわなかった。そうですね。ジュンク堂いったら勉強になりますもんね。

自分で本屋をはじめてしばらくたった頃、ジュンク堂の店長がお店にきてくれた。よれつとしたジャージミたいなん着て、奥さんもいっしょに。店の前で古本売りませんかと店長は言った。「あんまり古本屋さんしらんし直接スカウトするんはじめてや」と言った。それから3ヶ月間はジュンク堂に出す本のことばかり考えた。ちょうど自分の店の売り上げが落ち着いてきた時期だった。開店直後、知り合いがいっぱい来てくれる時期はとつくに終わり、これでやっていけるんやろうかと毎日の売り上げをみて心細くなっていた。ジュンク堂にワゴンを出した初日の売り上げスリップの束にはびっくりした。本っ

てこんな売れるんや。毎日、誰もこない店の帳場で前の日の売り上げを確認する。なんとか暮らしていけるかもしれない、と思った。自分が本を売る場所はここだけじゃない。わざわざ来てもらわなくてもこっちから本が売れるところに出かけていったらいい。本を買う人はたくさんいる。あの時期、ジュンク堂のワゴンがなかったら潰れていたかもしれない。ところが。

こうやって閉店がきまった店のことをいまさらああたこうだ言うのは意味がないことなのかもしれない。閉店が決まってから名残惜しんで本を買いに行くことには何の意味もないのかもしれない。でも、もしそうであれば、意味なんてなくていい。

本はお店のために買うのではない。自分のために買う。思い出は自分のためにある。いつまでもウジウジとジュンク堂のない京都の街のことを考えていようと思う。

と、そんなことを言っていたら「閉店まで最後の2週間、ちよつとだけ古本出す？」とお誘いがあった。どんな景色が見れるんだらうか、どんな人が来るんだらうか。ジュンク堂京都店古本市2月11日(火)〜29日(土)1階ワゴンにて。

無限に向かう人々 ①

AN ETERNAL GOLDEN BRAID

芝野 浩貴

(地球探検家)

芭蕉が追っかけていた西行は友であった崇徳上皇の霊を慰めるために旅に出た。保元の乱に負けて崇徳院は直島に流される。河村瑞賢によると北海の風や潮にも慣れた大型船を持ち、卓越した航海技術を持っていたのが直島の船乗りだったらしい。直島美術館は安藤忠雄建築で有名で数度訪れたことはある。昨年訪れた時の展示では、生きてる蟻が世界の国旗で彩られた砂の中を餌を求めて歩き国旗を繋いでいるアートが印象的だった。何故直島を思い出したのかは、1日に同時に INFINITY のタイトルを持つ映画を観たからだ。ひとつは「草間彌生・INFINITY」、もうひとつは「エッシャー 無限の旅」。他の観光地と異なり、若者と欧米人、特にヨーロッパ人が目立つ。その理由の一つは、今や世界にファンを持つ草間彌生作品だ

ろう。直島の埠頭の南瓜のオブジェは草間彌生が初めて作った野外作品。近くには不規則三角形だけで作った多面体オブジェ。まさに、草間彌生とエッシャーである。何故無限なのか？二人の絵柄は創作当初からヒッピーには受け入れられた。草間彌生については、「無限の網」が象徴してゐるだろう。「ナルシスの庭」に至っては、華厳経のインドラの網を感じずにはいられない。インドラの網は天高く四方に糸を張り、その繊維は蜘蛛糸より細く、菌糸よりも緻密で黄金に光ると。タイトルの ETERNAL GOLDEN BRAID は直訳すると永遠の金の編み紐。

あの名著「ゲーデル・エッシャー・バツハ」のサブタイトルで、エターナルの E、ゴールデンの G、ブレイドの B は、エッシャー、ゲーデル、バツハの頭文字でもある。編み物もする文筆家の橋本治や坂口恭平は有限の言葉の隙間に無数の言葉を入れながら、インドラの網を張っていたのかもしれない。「村上春樹、河合隼雄に会いに行く」をもじって、「村上龍、草間彌生に会いに行く」とタイトルされた対談から数年後の 90 歳の草間彌生のインタビューを含むドキュメンタリーだった。映画「ドリーミング村上春樹」では、村上春樹のファンである監督が村上の日本語をどう外国語に翻訳するのか苦悩していたが、いずれも外国人監督である。元号が変わる前、令和元年 5 月 1 日発行の本を初めて見たのは、思い出の作家

たち(谷崎、川端、三島、安部、司馬という本だった。著者はドナルド・キーンだった。イザベラ・バード、ブルーノ・タウトの視点然り。これだけ日本のメディアが凋落すれば、日本からフラットに離れて物を見る目の存在に学ぶべきだろう。草間彌生は幻影・幻聴から身を守るためにドットを描き続けていることもあるが、無限の動作だ。草間ドットには観るものを人間が誕生する以前に戻す水滴の力がある。エッシャーは、1938年のアルハンブラでパターンに興味を持ち、G・ポリヤの17分類図からパターン作品に夢中になった。(注)2次元空間内の繰り返し返しパターンは平行移動、点対称、鏡映、並進鏡映、180度、90度、60度の回転の組み合わせで17パターンある。日本文様解剖図鑑によると、古代エジプトのロータスから中国の仏教模様、日本の唐草紋様へ伝わったとある。「分ける 割る 折る 増やす 並べる 捨る 重ねる 盛る 組み合わせ 向かい 抱き逢い 追い 寄せ 覗き 持ち合い 繋ぎ」などで作られた日本の伝統文様には、なんと17分類全てのパターンが含まれているというから、アルハンブラのイスラム文様同様、日本の先人恐るべしである。至る所幾何学者あり。エッシャーに関しては、一昨年上野のエッシャー展に行き(2018年は生誕120年だから、映画も展示会も企画されていた)、本物の「メタモルフオーゼ」を鑑賞した。

チェス盤から爬虫類、虫、鳥、魚へと変態し、またチェス盤へ。AIの進化した今はもつと辛辣なメタファーとして突き刺さる。GEB(ゲーデル・エッシャー・バッハ)でのエッシャーに関しての作品は「プリント・ギャラリー」について記述してある。ひとりの若い男が立っている画廊で小さな町の港にいる船の絵を見ているが、画廊は町の中にある、町は絵の中にある、絵は人の心の中にある。ペンローズの三角形であり、リーマン面である。その言語版がゲーデルの不完全性定理に繋がりが、その音楽版がバッハの「音楽の捧げもの」にある果てしなく上昇するカノン、シェパード・トーンに繋がる。今iPhoneの普及で世界中の人が画面操作の時に、指で拡大縮小・回転反転・並進移動させている。杉原厚吉主催・主導の錯視展にも参加したが、台北故宫博物院やニューヨークでも展示され不可能立体が世界に広がる。トポロジー攪乱立体、変身立体と言われ、円が多角形に見えたりするのである。高校数学で説明できる。人間の盲点には視細胞はない。血管と神経が集まっているからである。有限と無限のせめぎ合うところに思いもかけぬピンチもヒントもある。

失われた本屋さんを求めて

ムラカミヒロシ

（ライオン・ブックマン）

十代の頃に買った本は、その店の佇まいや買った時のシチュエーションと共に強く記憶に残っている。

当時、少ない小遣いの中から、一冊一冊を丹念に選んで、買ったものは舐めるように読んでいた訳であり、まして、記憶力の最も良い時期であるのだから、当然といえば当然である。

学校帰りに、友達を送りながら立ち寄った店は、専ら智頭街道筋にあった。中でも、一番通った本屋は、二階町にあった富士書店本店である。

ここでは、中学生に成りたての頃、春陽文庫の「江戸川乱歩長篇全集」の一冊を買った。忘れもしない「黒蜥蜴・湖畔亭事件」であった。

小学校時代、夢中になって読んでいた少年探偵団シリーズ（の一部）のベースが、こういう大人物であったことを知り、驚いたものだった。シウルレアリスム調の表紙

絵も、不思議な魅力があった。

筒井康隆は角川文庫、星新一は新潮文庫、ハヤカワJ AやSFは、始めの頃であり、『SF入門』をガイドに安部公房の『人間そっくり』や海野十三『十八時の音楽浴』などを買った。『霊長類南へ』は単行本がまだ店頭にあった。

当時は、出版点数も少なかったためか、作家ごとのコーナーがあり、数年前の新刊でも並んでいた。北杜夫や遠藤周作の本も、そんな風にして手に入れた。ハードカバーの単行本が五百円で買った（最後の）時代である。

筒井や小林の著書を出していたせいも、晶文社という出版社は気になる存在で、「ワンダーランド」という巨大な雑誌が出た時は、すぐ手を出した。御存じの方は御存じの、植草甚一編集の、スクラップブックのような雑誌である。巨大と言っても、当時、グラフ雑誌は、このサイズ（B四）で出ている、アサヒグラフも毎日グラフもそうだった。芸能誌の「明星」も特大別冊を出したりしていた（これは、もう一サイズ大きかったような気がする）。ただ、文芸誌（なのかな、こいつは）としては破格だった。この前後に、晶文社は、（バラエティ・ブック）なる本を矢継ぎ早に出している。一人の作家の、エッセー、小説、ルポルタージュ、コラム、などを雑誌感覚

で、レイアウトを凝らし、一冊にまとめた単行本である。植草『ワンダー植草・甚一ランド』、小林『東京のロビンソン・クルーソー』、筒井『暗黒世界のオデッセイ』などが、それである。

「ワンダーランド」は、キャロルやらボブ・ディランやら、プレスリーやらミッキー・カーチスやら、音楽記事が多く、淀川長治があると思えば浅川マキがあり、ちばてつやが書いていると思えば菅原文太のインタビュールがある、といった塩梅で、大方は未知の世界であったけれども、兎に角、不思議な魅力に満ち満ちた雑誌だった。天沢退二郎の『光車よ、まわれ』の紹介記事も載っていた。

小林信彦の『大統領の密使』『大統領の晩餐』も、常備の中から見つけた。朝日ソノラマの児童物とは打って変わった、アクションとノスタルジー（ここが肝心）の世界があった。特に、後者は当然ながら昭和ひと桁世代のそれであり、我々の父親世代のものである。少年倶楽部や日活アクションやしゃぼん玉ホリデーをベースにしたギャグやパロディが連発されれば、嫌でも覚える。当時は、TV各局がロードショー枠を持っていて、邦画もたまに放映していたから、小林旭や宍戸錠や赤木圭一郎が出てくる映画を父と一緒によく見たものだ。

文庫の棚も、レーベルがまだまだ少なく、大手四社（岩波、新潮、角川、講談）の他、旺文社、東京創元社、早川書房、社会思想社、保育社などが常備されていた。岩波は★マーク（分かる人にしか分かるまい）の頃で、唯一パラフィン掛けが残っている文庫だった。旺文社は、全て草色の同一装幀で、何と箱入りであった。各社の中では、もっとも値段が安かったように記憶するが、古典名作しか入っていなかったで、余り縁がなかった。確か、ゲーテの詩集を一冊買っただけだったと思う。ハヤカワは、カラー口絵と挿絵入りの先駆けで、石森章太郎、藤子不二雄、松本零士、永井豪などが描いていた。創元もバロウズなど一部の作家は、口絵、挿絵入りだったけれど（武部本一郎！）。

保育社は、カラー、モノクロ半々くらいの写真文庫で、ビニカバ掛け、一冊づつワン・テーマでまとまり、小百科事典という趣で重宝した。

やはり、一番面白かったのは角川で、ちょうど春樹が文庫の編集をしていた頃である。海外文学は、映画の原作ものが多く、「初恋」や「ベニスに死す」のような古典作品にも映画のスタイル入りのカバーを掛けていた。ビジュアル戦略の走りだろう。

ムウイーシカの年

山本 千津子

(KOSHKA コーシカ)



年末にロシア語のメールが届いた。件名は日本旅行。

「メリークリスマス！ 私たちは今、ユダナカ温泉にいます。明日は温泉に入っているサルを見に行く予定です。年末年始は大阪にいるので、十二月三十一日に鳥取のあなたのところへ行って砂丘と日本海を一緒に見たいと思います。」という内容だった。えっ？ ちょっと待って、ユダナカ？ どこや？ 温泉に入るサル？ 確か信州にあったような……メールをもらって嬉しいよりも、あまりにも突然で、どう返信していいものやらと思ったが、鳥取には以前働きに行っていたが住んではいないので、大阪で会いましょう、と提案した。

念願の日本旅行は息子さんからのプレゼント。定年後も夫婦で働いていらしたが、ご主人が完全に退職された

のを機に、家族三人で日本旅行を計画、宿泊先だけをロシアから予約し、滞在中は息子さんがスマホを片手にJRのジャパンレールパスで自由に移動とのこと。ウラジオストクに住んでいた頃に知り合ったニーナさんと会うのは二十年ぶりだ。コサツクの出であること、ご主人がロシア正教の古儀式派信者であることを誇りに思い、他のロシア人とは違って日本人と通じるところがある、という意識を私は彼女から感じていた。そして毎年、沿海地方で採られた天然の蜂蜜をもらっていた。

湯田中温泉から金沢、福井の温泉を回って大阪へ。何度かメールのやり取りをして、鹿児島島の指宿へ向かう一月二日に姫路で会うことになった。大晦日には鳥取砂丘で寒さに震えながら日本海を見て、城崎温泉に入り、元旦は白浜温泉へと、日本海から太平洋まで、JRのパスを最大限に利用しての日帰り旅行である。京都も奈良も大阪も観光しないで、人混みを避け、日本の自然、車窓からの風景を楽しみ、その土地の温泉につかって、日本人への興味から人間ウォッチングを楽しまれた。しかも温泉では裸のお付き合ひ、日本人みんながスリムで小柄なわけではないことを知ったと。どこに行っても出会った日本人は礼儀正しく親切だったと感動されていた。

さて、姫路ではもちろんお城へ。歩きながら互いに近況報告をする。でも、いろいろあったことを話すよりも、青空をバックにそびえたつ姫路城を見上げながら、「クラシーヴァ（きれい）！」と一緒に感動の声を発するだけがいい。門松をはじめ手入れされた木々や、庭園、お堀の錦鯉、心が通い合っている間柄であれば、言葉によるコミュニケーションはいらなくても、と腕を組んで歩きながら思う。ほんとはロシア語を忘れてしまつて言葉が出てこない。ロシアでは女性同士で腕を組んでよく散歩したものだ。決して高齢の彼女を支えるためではなく、自ずと寄り添つてこの今一緒にあることを喜ぶ。

一休みにお抹茶一服、気に入つてもらえた。そして、プレゼントに用意したねずみの顔を模した飴を差し出したところ、思わぬ展開。干支にちなんでいることを説明するのに、今年はずみ年の年、「ミーシカ、ミーシカ」と何度も言うが、どうも伝わらない。ロシアでは十二支は東洋のカレンダーとしてよく知られ、新年を祝うカードにも干支のイラストが描かれていたりするのに。「去年はイノシシで、今年はずみ」と私。彼らは「クマ年つてあった？」熊についての話がしばし続く。そういえば、日本がボイコットした一九八〇年のモスクワオリンピックのマスケットは子熊のミーシヤ、ロシア人にとつて熊

といえ、親しみを込めてミーシカという名で呼ぶ。最終的には、「ひよつとして、マウスのこと？」とスマホでロシア語の綴りを見せられて、「あー、ムウイーシカ」とお互いやつと理解できて大笑い。飴一つ渡すのにこんなに苦労するとは思わなかった。

鹿児島後は東京で二泊、皇居周辺を散策予定。日本人は天皇制を守るようにと何度も言われた。日本では安心して思い通りに旅ができる、清潔で便利で人々がやさしい、ウラジオストクへ戻つた時の現実にとれほどショックを受けるか怖い、と話された。なぜ私たちの国はこうなの？とがっかりしてしまふそうだ。食事はコンビニのお弁当やおにぎりとインスタント味噌汁がお気に入り、東京から西日本へと列車の旅を満喫された。次回は東北への旅を実現してほしい。再会した最初の会話は福島のことを、鳥取への旅の話では岡山のことを心配して現状を尋ねられた。私よりも日本のことを思っている人たちだった。

鳥取あれこれ その四十二

内田克彦

(地域研究家)

夏目漱石の『坊ちゃん』。橋本好藏(栗谿)が誰だかのモデルであると書かれているのをかかって読んだことがあったが、詳しくは調べていなかった。

二〇一三年に秦郁彦著『漱石文学のモデルたち』が中公文庫で発刊され、「漱石在任時の松山中学校教職員」が一覧表にして掲載されていた。出身地を「鳥取」とする橋本の名も「(関係教職員)」として挙がっていたが、在任期間が「27・3・28・4」とあり、漱石が着任したのは明治二八年四月一〇日であるため、重ならないのである。

ところが、出身地を「鳥取」とするもう一人の人物が挙がっていた。校長の「住田昇」である。在任期間は「26・2・28・10」とある。「モデル像がほぼ確定的な作中人物」として「『狸』校長こと住田昇」と記述されていた。『坊ちゃん』には「校長は薄髯のある、色の黒い、眼の大きな狸の様な男である。やに勿體ぶつて居た。」と書かれている。

住田昇についての研究は、既にかなり進んでいる。二〇〇三年刊行の木辺弘児著『不機嫌の系譜』に、その間の経緯が簡潔にまとめられているので、引用する。

父、史郎の死後、残された書類を整理していたとき、今度は手文庫の底から思いもかけず祖父、住田昇の自筆文書が出てきた。

昇は明治中期、全国各地の師範学校で教職につき、最後は熊本で病没したのだが、彼の遺している日記は、明治二十一年の山形師範時代から同三十七年熊本視学官時代にいたる、膨大なものである。(略)

昭和四十八年、四国女子大学教授新垣宏一氏が私宅に來られ、住田昇日記の閲覧とコピー作製許可を求められた。もちろん快諾したが、その結果は後に同大学の研究紀要、

住田昇の松山日記について(漱石時代の松山資料として) 新垣宏一(昭和五十六年三月)

として発表された。膨大な昇日記のうち、明治二十年十一月から同二十八年十一月に至る、彼の松山中学校長時代のもの解説した論文である。

早速この論文を入手し、載っていた経歴を見る。安政五年に、会見郡宗像村の宗像神社神官の内藤家の三男として生まれ、明治八年に、会見郡尾高村の住田家に養子に入っている。明治九年に広島師範学校に入学したが、一年で廃校、小学校などで教えたが、明治十一年東京師範学校中教師範科に入学、明治十六年十二月に卒業し、翌年熊本師範学校、さらにその翌年には山形県師範学校に勤務、教頭に昇進している。明治二十二年に再び熊本尋常師範学校に転じ、翌年には学校長に任じられ、明治二十六年二月に松山にやってくるのである。

解説された『日記』には、橋本好蔵が頻繁に出てきており、熊本時代に一緒だった橋本を、先に松山に行った住田が招いたのがわかるほか、橋本にお金を貸したり返してもらったりしている記述もある。また、明治二十八年一月一日付けに出てくる「福田」なる人物について、「備考」欄を読むと「福田定一。明「ママ」二十七年八月から二十八年八月まで在職、やはり住田人事か。鳥取市寺町の人。体操教師。」と出ていた。不詳の人物である。

しかしながら、「夏目金之助」の名は、明治二十八年十月十三日に開かれた住田校長の送別会のメンバー

として登場するだけである。このことから、二〇一四年七月に発刊された『夏目漱石周辺人物事典』の「浅田知定」の項には、次のように書かれている。

愛媛県参事官浅田知定は外国人教師ジョンソンの月給一五〇円の半分近くの八〇円を用意して漱石を招いた。実に住田校長の六〇円よりも高かった。この発想は校長住田昇というよりも参事官浅田の発案であろう。「住田昇日記」には夏目漱石獲得の記載は一切ない。

なお、『「坊ちゃん」事典』が同じ二〇一四年の一月に発刊され、「住田昇」の項では「狸のモデル」としながら、「教頭の横地石太郎が長くモデルの本命と見られていたことは、人物像において住田と狸との間に相当の隔たりがあることを示している。」と記述、「校長」の項では、「モデルは明治二六年に愛媛県尋常中学校の校長に就任した住田昇だと言われているが、教頭の横地石太郎という説もある。」と記述されており、住田イコール「狸」校長とは断定していない。

「セザンヌにリベルテ」ノ記憶

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

0

「S藤先生は、先週〇〇の追悼特集やったと思つたら？
今度は△△が亡くなったと此のところ本当にご執心。来
月は××の没後何周年つて。演奏家やら作曲家のそんな
のばかりやつて肝心の、ご自分のはいつたひだうする
の!」皮肉な調子で仰言つた大野ママ。高知で40年以
上毎週末連綿と続く、ギネス級！レコードコンサート創
立メンバー達の一齣である。リベルテは好楽家達の悲喜
交々かはさるゝ「場」。そのS藤先生も逝かれてまう久し
ひ。

I

「ソロモン、この人（のピアノ）は聴いたわ、生でね。
東京の何処のホールだったか？は忘れたけれど」「え？
凄いなあ？ リサイタル？ 協奏曲の独奏？ 曲はやはり
ベートホーフエン？」矢継ぎ早に飛び出す僕の質問に答
へて曰く「その辺りがよく思い出せなくてねえ」「でも
とても巨きな人だった、身体ばかりでなくて音楽もね」

此のやうな断片的記憶が、未だ40にさへ届かなひ僕には
訝しく思へた、だうにも。しかし、程なくして今度は父
が「ジャンドロン、この人は聴いたなあ…。高知に来て
RKCホールで聴いた」「じゃあ、僕も一緒に聴ひたの!？」
「いやその辺りは全く何も覚えて居なひ」ええつ!?!此方
も、やはり演奏形態も曲も何も覚えてゐなひと云ふ、さ
ういふ事が有るんかなあ？ いったひ：其れから十余年：
疑問は時こそが解決して呉れた。現在の僕には記憶と云
ふもの自体が、何もかも「斑な総天然色」、見事に輝き
渡つてゐるではなひか。

II

今はまう流行らぬ名曲喫茶の代表格として昭和・戦後
高知の文化シーンを象徴する件のリベルテ。
スメタナ、プラハム、Aシフ、ARシュミット、クベ
リークトリオ、Mフランス、作曲家安部幸明：土佐路を
訪れた世界の楽人が交差した場。歴史の証言者としての
一面も覗かせ。

III

近年、安道湖畔に立つ美しひ美術館を訪れ、僕は館蔵
品展で想ひがけなくH某の作品群と邂逅、其れに見入る
うち目頭が熱くなった：今は亡き、高知出身の版画家。
今「作品」だけが遺つて、此から先は作品こそが語り続
けゆくのだらう。在りし日の夢や情熱、人々の生活。

不意に現れたのは・少年の日、全く偶然に垣間見て了つた、今はなき画廊喫茶セザンヌ（此方も大野さん経営）での一齣。

「まう、いかんったらあ、なんでこんなになつて、まだ呑むのよおっ」瘦せて折れさうな大野ママが酩酊の画家を抱きかかへよろめき乍ら「ちよつとお…ヒワサンつたら…なんとか云ひなさひやうっ！」溜め息の中大人達のこんな言葉が零れて。まるで映画の中の一シーンのやう、あれは何だったの？ 自問してゐただけれど、確かに「夢ぢや無かつたんだよ！ あれは」この作品群がママに抱へられ、此処未来の松江に運ばれ来たやうに、時空を超へよその土地に、喪はれし昔の人々の姿、生きた証し、そして記憶が投げかけられてゆく…次々と。

IV

物憂ひ曇天の今朝、何故か蒲団から起き上がれなひで居る所、不意に郷里からママこと大野稜（いつ）子さんの訃報が舞ひ込んで来た。

あれはいつだったらう？ 故人との会話が偲ばれる…
「谷崎ねえ…私はたった一作、あれで参っちゃったんよ、さて何だと思ふ？」 「ん？」 「いつてみて？」 「鍵？ 卍…？」 「違ふ、違ふ」「刺青、春琴抄」「違ふな」「さういふんぢやないんだ、ぢや細雪」「其れも違ふ」…「ぢやあいつたひ何？」 「フッフ」…からからと、謎を誘ふ

爽やかな嗤ひ声、今少し朗らかに響き渉るやうである、
どうやら。

2019. 12. 15

〔今回の二冊〕

○谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のおんな」（新潮文庫・刊）

○同「秘密」（同文庫・刊）

〔今回の一枚〕

J.ブラームス pf.協奏曲第一番 二短調作品15

ソロモン pf.ロクベリーク指揮フィルハーモニア管弦楽団

(Rec. 1952)



(画 A・T)

体力で書く復讐譚

古賀 啓三

(米国シガン州 隠棲)

なっていないかったのだろう笑。

しかしこのフランスの小説を読んで、大袈裟だが愕然とした。最終章の小説中小説の書き出しが、本文の冒頭の書き出しと同じである、という点で③と同じだったからである。と、まあ小説をよく読むひとであれば、然程目新しい趣向ではないのかもしれない。

『悲しみの…』では、終盤、九割方読み終わったところで、ここまで全てが犯人の書いた小説中小説だったんですよ、となる。僕も実は同じことを考えていたのだが、技巧的に達成できなかった。しかしルメートルも仕掛けを見せた後の終わらせ方にはかなり苦心の様子が見て取れる。

小説中小説ということでは、③で更に小園という作家に、当作で大学在学中に芥川賞を受賞する『収容所の愛』と作中で執筆中の作品を書かせている。以下、後者の粗筋である。

『書きかけの長編の題は未定だが、それは二世議員と政略結婚させられた、彼女自身の父親も財界の大物であるが、男達の野心のためだけに閨閣構築の駒としてのみ扱われ、男児の出産と義母への忠誠だけが存在の意味で、父にも夫にも省みられることのない、若い妻の物語。通う日舞の師匠の屋敷で、通常は離れに蟄居させられてい

趣味の小説だが、一応最後まで書き上げた七十枚以上の作品は、①『ファイラーとポイド』、②「自己消滅した僕が見る夢」、③『〇文学に於ける抑圧と解放』、④『女六様』の四本である。

③は最終章が登場人物のひとりによって書かれた小説中小説で終わる、という結構になっており、奈良さんにご紹介頂いた、東京で編集のお仕事をされている方に読んで頂いたところ、この小説中小説が上手く行っていない、この部分がしっかりしてくれば完成度が違ってくるのではないか、という感想を頂いた。早速書き直すと、仕掛けが明瞭になった、とお褒め頂くと同時に、ミステリーだけど、小説中小説が上手く使われている、ピエール・ルメートルの『悲しみのイレーヌ』という作品を読んでみる、と勧められる(ということは修正稿もあまり良く

る盲目の弟と偶然出会い、唯一心情を吐露し合える仲間となるが、彼には彼の靈力を信奉する一団の教徒が居り、教主は若妻を自我への目覚めと導き始め、といった展開で、強制収容所のマサコのように、荒々しい、獣じみた解放に向けて突き進み始めることが予感される。』

この小説中小説を製作してみようと思つてゐる。

小園という男は人品卑しく、助平で、唾棄すべき人物だが、「書く」ということに対しては一縷の情熱を失つていないようです。つまり他人とは思えない（笑）。

④を書く際、『カタストロフィックな予感』という題で、本誌にそのプロット・青写真を書かせて頂き、割と上手く行つたので、今回も踏襲してみたい。

a) 冒頭は老境に入った「若い妻（以降妻）」をアメリカから見舞いに来た孫娘の視点で語られる。痴呆状態の妻は病床で時折、発作的に自分の来し方の断片を赤裸々に吐露し、謎の多かつた孫娘自らの生い立ちにも光が当てられる（孫娘は、妻が死ねば莫大な遺産の唯一の相続者でもある）

b) 結婚後、妊娠の兆しのない妻は義母の陰湿な苛めに遭うが、学生時代妊娠体験があり、不妊の原因は自分

ではないと信じてつつも、中絶で体を傷めた、ということもあり得る、と、この家にとつて無益な存在でしかない自分の将来を見据えて絶望している

c) 奔放に遊びまわる夫の妹の女子大生が妊娠し、中絶を図るが、（胎児が男であるとの確認後）義母が止め、産んで兄夫婦の嫡子として育てることを決める

d) 妻の妊娠の噂は義母により社交界に広められるが、妻と義妹は出産まで蟄居させられ、ふたりの間には侮蔑と同情が綯交ぜとなつた複雑な連帯が生じる

e) 義妹は女子大に復学することも、結婚することもなく、大邸宅ではあるが、三世代の同居を続け、嫡男に対し、実母のように、いや母性を超越するものを誇示するように溺愛する

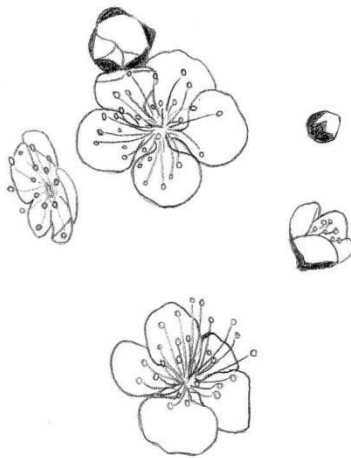
f) 盲目の教祖は、世間的には日舞の師匠の弟であるが（十八歳下）、彼の神秘性は時に超越的な優性を生み出す「濃い血」にあるのではないか、と信じる教徒もいる。側近の教徒たちの前で、時に浮遊して床の上を滑空しているとしか思えない舞を披露したりする

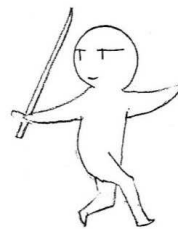
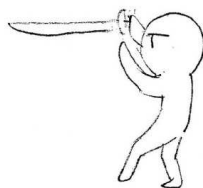
g) 妻と教祖の間には濃密な関係が生じているが性的な交渉があるかは不明瞭である。妻は四十三歳で懐妊し、女兒を出産する（やはり不妊は自分のせいではなかった）。この時、嫡男は十八歳で、米国の大学に留学し、義妹も身の回りの世話をする、という名目で帯同する。

a) の孫娘は米国で生まれた嫡男の子である。彼女にも超越者の兆候が見え隠れする

一義的には報復譚かもしれないが、綾のあるストーリーにしたい。そして少し長めのものを書きたい。前出の編集者の方に（勝手に、この方と奈良さんを書くことに対する恩人だと思っているのだが）僕の書くものは、いつも、より長い小説のプロットのような印象を受ける、という評を頂き、自覚もしている。

走ることも以前は五キロが限界だと思っていたのに、ずっと歳を取った今、一日置きに十キロずつ走っている、やれば出来る筈だ。書くことの基本も体力なのだから。





一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階

クリムトのあと(愛知のおいしいもの)

あきの素生

(くうねるめがね)



豊田市美術館のクリムト展を見終わったあとは、一泊して、前々から訪れてみたかったところを二、三か所巡ることにしていた。とはいえ、前日の夜に思い立って、あれやこれや手配してやってきたので、いろいろとリサーチ不足で、晩ご飯はごく簡単に済ませてしまった。もつたいたいことをした。

これではいかんと、ホテルで落ち着いてから、翌日の朝食をどこで食べるか考える。愛知だから「モーニング」？小倉トースト食べたい、と、聞きかじり読みかじりの知識を総動員して調べてみる。さいわい、小倉トーストを出すカフェがホテルの近くにあった。早くから開いていて、予定していた出発時間に間に合いそうだ。やはりこの地の旨いものを食さねば、とほくほくしながら床に就いた。

翌朝、お目当てのカフェはすぐにはわからず、少しばかりうろろして、入口を見つけた。小倉トーストとコーヒーのセットを頼む。開店してまもない時刻だったため、荷物(といってもリュックひとつとクリムト展の図録だけだが)を置いてもゆったり座ることができた。

運ばれてきたのは、トーストとポテトサラダ、あんこの入ったカップ、マーガリン、コーヒー。お店によるのだろうけど、あんことマーガリンを自分で好きなだけつけるスタイルのようだ。あんこは結構量があり、三分の二くらいをのせたところでこぼれてしまった。残りはデザートにする。

あんことマーガリンたっぷりトーストは、禁断の味だった。あんこの甘みと舌触りを、マーガリンの塩味とまるやかさが引き立たせて包み込む。かりつとしたトーストによく合う。しあわせな朝ご飯だ。コーヒーをゆっくり味わってから、目的地に向かう。

半島の近くまで来たら、その突端まで行きたくなる。ということ、レンタカーを借り、渥美半島の伊良湖岬まで足を延ばした。海のすぐそばにある道の駅に入り、まずは食べる。食堂には、きしめんがあった。ここでリベンジできるとは。きしめんの食券を迷わず買う。しかし、それよりインパクトがあったのは、「焼き大あさり」

だ。せつかくここまで来たのだから、食べない手はない。食券を二枚出し、水を飲みながらぼんやり待った。

まずはきしめんが出てきた。やはり、平べったい麺は好きだ。つるつるした食感を唇いっぱい感じられるからだろうか。あつという間に平らげてしまった。

そこからさらに待つこと数分。番号を呼ばれて行くと、手のひらサイズといつても過言ではない大きな貝が二つ、皿にのせられていた。あさりといえ、しじみより大きく、はまぐりより小さい、というイメージだったので、とにかく驚いたが、この度調べてみたら、大あさは、あさりとはいく種類のものらしい。納得。とはいえ、こんな大きさの貝、リアルで見ることがない。身を丸ごと食べられるように貝柱も切り取ってのせてあり、その心遣いがうれしい。焼き立ての身は熱く、味が濃く、おつゆまでおいしくいただいた。

お腹が満たされたあとは、道の駅の中をぶらついて、岬周辺の情報を得る。灯台まで、思ったより距離がある。島崎藤村の「椰子の実」の歌碑は、さらに遠い。レンタカーを返す時間、帰りの電車の時間を考えると、あまり余裕がない。でも、なるべく見て回りたい。己の計画性のなさを呪いつつ、わがままを叶えるため、レンタサイクルを利用することにした。はじめての電動自転車だ。

電動自転車は、すごい。長い坂道を登るのだが、まったく苦にならない。下り坂では、電動アシストをオフにするのにもたついたりもしたが、不慣れを補ってあまりある活躍だった。おかげで、青い海に映える、どこか素朴な風情の、かわいらしい白い灯台を間近で見ることができた。

「椰子の実」の歌碑までは、とにかくペダルを漕いだ。息を切らせたどりで着いた歌碑は、太平洋を背に、静かに佇んでいた。穏やかな午後の太平洋は、陽に灼かれ、あまりに広々として、その大きさに倦んでいるようにすら見えた。この海原をはるばると渡って流れ着いた椰子の実に、物語を見出す気持ちがあったような気がした。

レンタサイクルを返し、レンタカーを返し、無事駅に着いた。最後のご当地グルメ、みそカツサンドを手に、帰りの電車に乗り込んだ。



歲月のはなし



ドラメリア (座敷わらし)

十年ぶりに県外のあるお寺に仏像を観に出かけた。前回はある人で行った場所。心残りのある別れ方をした相手でそれきり思い出さないようにしていたのだが、節目でもあつたし小さなきつかけも重なって、もう一度戻ってみようと思つた。

前回は車だったが、今回は電車。隣県ながら鳥取からは案外遠い。田園風景を走るのどかなローカル線や私鉄を乗り継いでたどり着いたそこは、驚くほど変わつていなかった。鎌倉時代に建立され長い年月を経てきたこの場所にとつて、十年など瞬く間の出来事なのだろう。

靴を脱いで板の間の本堂へ上がると、ほとんど人のいない堂内はあのとときと同じようにしんとした静けさに満ちている。薄暗がりに佇む黄金の阿弥陀如来を見上げながら、長い間じつと座つていた。色々伝えたいことがあつた気がした。後悔ばかりだった。ひどい、とか、どうして、とか、当時自分の中で何度も繰り返した言葉があつ

た。けれど、久しぶりに記憶の底に降り積もつたものをすくい上げてみると、当時私自身を傷つけていた強い感情はかたちをなくして指の間からさらさらこぼれ落ちていつて、手の中に残つたのはもつと穏やかなものだった。……そうだ、ありがとうと云いたかつたのだ。とふつと思つて、流れた歳月を実感する。これで良かったとまでは言えないけれど、もらつた温かい記憶はわたしの中の柔らかな部分に今も灯つている。そのことに気づけるようになるのなら、年をとることは悪いことではないのだ、と思えた。



・編集後記:

お気に入りの紫の傘を盗られてしまい、意気消沈。強風にも耐える丈夫な傘だったのに。用が終わったら戻してくれないかなとお祈り……していたら戻ってきました(喜)

ドラメリア(編集長)

「音信不通」連載中の鳥居貴彦さんの「開風社 待賢ブックセンター」が京都ジュンク堂で古本市参加。閉店までの2月11日(火)〜29日(土)1階ワゴンにて。鳥居さんはどんな風景を目に刻んでいくことでしょう。

奈良敏行(発行人)